⑥ 座談会・指導者の求めるサッカー環境

■内田　渉・野地芳生・伊藤陽介・石井和則

1―サッカーの現場と青少年
2―サッカーの指導者として伝えたいこと
3―サッカー文化の土台づくり
4―ワールドカップをきっかけにサッカー文化の定着を

1―サッカーの現場と青少年

司会　この座談会では、子供たちが心身ともにたくましく成長していくために、サッカー環境やスポーツ環境はどうあったらよいのかを日頃から接している指導者の皆さんにお話しいただき、ご提案いただければと思っています。

内田先生は中学生という難しい年頃を相手にサッカーの部活動の指導をずっとなさっていらっしゃる立場からみていかがでしょうか。

生活指導面での苦労～まずは人間関係をつくること

内田　中学校は正直言って生活指導面で疲れます。人間形成が先にいかないとサッカーに到達できないんですね。僕は赴任して、まず、そこから始めるんです。生活面で問題のある子は試合に連れていかない、という指導もあるのですが、僕の場合は、逆に日曜日サッカーの試合をとおしてその子供たちとつきあう。よくつきあってみると全然悪くはないですよ。

たとえば、普通、練習試合は審判も子供にやらせますが、荒れていてできない場合もある。子供同士だと、自分は引っ張っても絶対クレームはつけないのに、人が引っ張ると、おい、引っ張ってんだろうって喧嘩が始まっちゃう。先生お願いだから審判やってって頼まれるのです。でも、そこで強い指導をするとだめなんですよ。大丈夫、大丈夫だよっていう感じでやるのです。そうすると、最後、先生、ありがとう、今度試合やらせてよとかいう関係になる。人間関係ができれば多少の厳しい指導ができますが、人間関係をつくるまでが難しいですよ

高校部活も厳しい環境

司会　中学が一番大変な時期で、高校に行くともう少し落ち着くのですか。

伊藤　そうですね。確かに中学生より大人ですけど。

神奈川県内の高校で今、二種高校体育連盟加盟校が二百十七だったと思いますけれど、昔は、ほとんどの子が中学まではクラブチームでやっていても高校では選手権を目指して高校の部活に入ったわけです。だから、どこの高校にも一人二人はすごくうまい子がいたのですが、今はそういうふうな子供たちはどんどんクラブチームに行ってる。かなり高校間の格差は出てきていますね。

全体のうち、正直言って半分の百校ぐらいはとりあえず部活をやってますという感じですね。そのうちの二十校ぐらいは部員不足に悩んでいる。春先の大会ですと、十校ぐらいはチームがなりたたなくて、不参加になります。

学校によっては、顧問はいるが指導者がいないためサッカーやりながら人間形成していくこともできない。そういう学校では大会に出てきても残念ながら、自分の学校の顧問の先生や審判に対して文句をつけたりとか、厳しい環境のところもありますね。

司会　野地さんはマリノスジュニアユースの監督をされていましたが、プロのサッカー選手になりたいという子供たちが集まっているわけですね。

野地　そうですね。技術的な部分では間違いなく超えてくるわけですけれども、精神的な部分では同じです。小学校六年生から中学一年生、十三歳くらいでは精神的に大人なわけじゃないので、そういう意味での問題点は同じように抱えている状況はあると思います。ただ、クラブチームの場合は好きで来ている。そういう意味では、それを充実していくのは指導者の仕事だというふうに思います。

■内田　渉氏
横浜市立南が丘中学校教員、神奈川県サッカー協会理事

家族や指導者とのコミュニケーションが大事

司会　精神的な問題というのはどんなふうにあらわれるんですか。

野地　日本では、スポーツ心理学という分野を取り入れていくことがすごく遅れていて、感覚的なものや今までの経験値でこの子はだめだとかいいとかいう判断をしている。僕は今はもうチームを離れていますけれども、現実に一人一人アンケート調査をして大学の研究室にそれを預けると、問題点というのは家庭の中のコミュニケーション、この辺のところに行き着く例がほとんどだといいます。決して親が会場へ来てくれていることが応援になっていない。親との信頼関係がなくなっている。サッカーの話を家でしたくないというような状況になっている選手も多い。

　家庭がしっかりしているときついことを指導されても、それにこたえるだけの能力を精神的に持ち合わせている。そうでないと、目標はあってもそれに耐えられない、ということになる。どこかにストレスを発散しなければいけないという問題点として、やはり指導者とのコミュニケーション、それから両親とのコミュニケーション、この辺のところが重要になってきます。

内田　確かに、子供と保護者との信頼関係がなくなっていますよね。どっちとるかといったら指導者とるんじゃないですかね。接触時間は指導者のほうが多いんじゃないですか。

親も変化

石井　幼稚園から見ていますと、親が年々変わってきていますね。親がみんな自分のお子さんがやるべきことをしてしまうことが多いので、自分で考えたり自分で行動したりする子が少なくなってきましたね。集団生活に初めて入れば、けんかはあって当たり前だと思うんですけれども、親は、自分の子しか見ていないわけです。だから、自分の子がやられているとすぐうちの子はいじめられていると幼稚園に訴える。でも、幼稚園で見ているとそうじゃないんです。いじめられているその子もやっているわけです。

　実際に子育てに悩んでいるお母さんもたくさんいますし、そういう意味では、幼稚園としてもただ保育をするだけじゃなくて、お母さんたちに対しても子供ってこういうもんですよってことを伝えていく必要があるのかなという状況です。

　人任せ、幼稚園任せ、塾に入れておけば、スポーツクラブに入れておけばとか、そういう親もだんだん多くなってきているのかなと。親で悩んでいます。

2―サッカーの指導者として伝えたいこと

司会　サッカーの指導者としては、子供たちにどんなことを教えようとか、伝えたいと思っていらっしゃるのでしょうか。

野地　自分でアレンジするものだと思いますよ。そこに指導者の熱意があるかないかという差がはっきり出るわけです。僕はクラブの環境というのは間違いなくいい環境だし、特にマリノスの環境というのはほかのクラブチームよりは数段いい環境にあって、だからこそ高いレベルを維持しなきゃいけないというプレッシャーの中でやっていかなければならないわけですが、やはりどのレベルでも、自分で創意工夫して、何かを伝えたいという指導者の熱意だと思います。

　友達を大事にするでも、用具を大事にする、あるいは食生活を変えることだって、何でも同じだと思います。どこに着目してそれを伝えていくかということだと思います。

クラブチームとの交流が刺激に

内田　一番僕が印象に残っているのは野地さんのチームと試合をしてわかったのですが、野地さんのチームは、コンビニに行かない、もし行ってもあれとあれしか買っちゃいけない、という規定をマリノスの中でつくっていた。これは大きかったんですよ。間食、油のスナック、それが身体に対してどれだけの影響を及ぼすか、そういう目標をもって子供たちが自分たちで管理する。

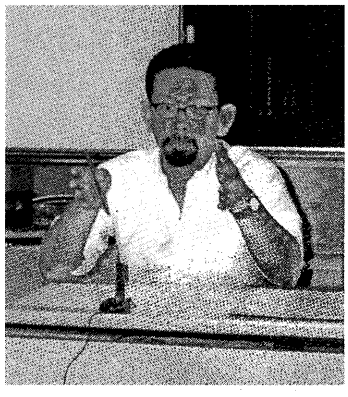
司会　目標はサッカーだけではないわけですね。

内田　サッカーのために、食生活も管理する、というふうに持っていく。クラブチームとの交流によって得るものがたくさんありますね。

サッカーを通してのしつけ

野地　五年ぐらい前ですが、新子安の駅とグラウンドの間を、三、四年のチーム、五、六年のチーム、それから中一、中二、中三というグループで週ごとに掃除をしていたんですよ。練習時間に集まったときにコーチがついてごみ袋を持たせて。そういうふうなことを

■石井和則氏
学校法人平成学園原幼稚園園長・原FC代表



■野地芳生氏
JAWOC横浜支部競技運営課長、神奈川県サッカー協会副理事長、元マリノスジュニアユース監督

させるようになると、自分で捨てなくなるわけですよ。捨てる友達がいたら注意するようになる。

司会　高校ではどうですか。

伊藤　同じですよ。自分の場合、やっぱりサッカーを教える以前の問題がまずベースにあって、それから次にサッカーという感じですね。例えば、野地さんが言われたようなゴミの話ですけれども、自分の学校で大会を運営します。そうすると一日八チームぐらいが来て、着替えてゲームをしてその間にいろいろ飲んだり食べたりして帰っていくわけです。学校によってゴミをどう処理していくかというのは随分違うんですよね。ごみ袋を持参したり、自分たちでまとめたものを置いて行っていいのかと事前に聞いてきたり、あるいは食い散らかして帰ってしまう学校もあります。終わってから、うちの学校を会場として貸してやっているからには、当然もとのように戻さなきゃいけないと。じゃ、みんなでグラウンドだけじゃなくて着がえた場所も掃除しましょうと。それで結果的に使う前以上にきれいになっていれば、学校全体がサッカー部にどんどんグラウンドを使ってくれということになる。逆に自分たちがほかの学校に行ったときに、こういうふうな掃除の大変さがわかるわけだからきちっとした形で最後片づけて帰ってくる。その辺のところをやっていく中で、他人の気持ちっていうのがわかってくると思います。ある意味でサッカーだけを教えているというのとはちょっと違うと思うんです。人間教育の中でサッカーを材料としてその子をよりいいものにしていくための指導だと思うので、それは高校でも全然変わらないですね。

石井　僕の場合は幼稚園から中学生まで指導していますがどの年代も同じじゃないかと思うんです。サッカーやる以前の問題として、子供が自分で使うわけだから自分で線を引いたり後片づけをするのは当然だと思うんです。そこら辺はしつけとして一番大事なところなんじゃないですか。小学生だからといってサッカーの技術だけを教えていればいいというものではないと思うので、やはり基本的な生活習慣とかそういうものがきちっとできていて、その上にサッカーというものがあると思います。いい悪いというものをきちっと小さいうちから教えておかないといけないと思うので、そういう部分では逆に僕なんかはうるさいですね。

野地　石井さんのところはバスで送り迎えだし、親に送り迎えされてるわけではないし、子供たちにきちっとやりなさいと言ったらやっていますよ。だけど、実際には親が参加しないとうまくいかない少年団では親が片づけています。僕もマリノスプライマリー（小学生のクラス）を担当しているときにも、子供たち同士で集まって僕が連れていく。現地で解散することもありますけれども、とにかく親は見るのは向こうでベンチの周りに来るな、と言う。結局全部子供たち自身でやらせるようにしていけば、子供たちは当然ごみだって拾わなければいけないし、片づけだってしなきゃいけないわけです。全部親がやってしまう少年団などもよくみかけますよ。

指導者の意欲の差

野地　今、気がついたんですけれど、クラブの指導者というのは自主的なんですよ。一生懸命子供たちの面倒を見ようと思ってスタートしているのだから一生懸命やりましょうよという投げかけができるんですよ。でも、学校の顧問の先生は温度差の部分のところが結構あるわけですね。その意味で学校環境の方が厳しいと思います。

内田　顧問の三分の一はやる気がない。三分の一は頼まれ仲人。あとの三分の一はやる気がある。試合見ると歴然としますよね。

　野地さんの言ってることって厳しい。この厳しさとの交流と技術の交流をするためにクラブチームとの大会を昔からやろうと言っていた。指導者にも子供にも教えたい部分というのがいっぱいあったんですよ。指示を見てると厳しいですよ、言葉一つ一つがね。だけど、言わなくても自然に動けるような体制を、日ごろの練習の中からゲームに至るまでもっていってる。指導者は教員じゃないでしょう。教員じゃないけど、そこまでいってるというところに僕なんかすごく感動したことがあるんですよ。

伊藤　サッカーに関して言えば、将来的に僕はその子が日の丸をつけられればそれはすばらしいことだと思いますけれども、それより今の自分の置かれている環境を考えると、育てた子が将来サッカーの指導に携われるような指導をしていきたいなと。あるいはサッカーをプレーする、教える上でこんなところがエキスなんだよ、こういうふうなところを考えていけば・・・・ということを教えてい

■伊藤陽介氏
横浜市立金沢高等学校教員

きたい。やはり当たり前のことを当たり前にやってくれよと。それは、サッカーでも人間としてであっても。

3 サッカー文化の土台づくり

司会 日本のサッカーは強くなっていますよね、ジュニアもユースも世界レベルになってきましたよね。

内田 やる気のある指導者たちが十五歳ぐらいの年齢層を必死で育てているんです。そこまではいいんですよね。それから後が問題なんです。

司会 その後、どう問題なのですか。

野地 甘やかされ中途半端な指導しか受けていない場合問題が起こります。厳しく指導されている学校から出てきているんですけど。

司会 日本のサッカーがうまくなり、プロフェッショナルとしての厚みを増してはいるけれど、スポーツ選手を育てる土台がまだ弱いということですか。

野地 と思います。それは、クラブ、学校を問わずどこの現場でも、どの過程でも一緒だと思います。そのところがすごく重要になってくると思います。それがサッカー文化ですから。

司会 では、一体どういうものがあればいいのでしょうか。

内田 環境よりはまず指導者だと思います。

野地 要するに、下の土台がしっかりしていないかすかすの状態だから、自分が置かれている立場というのをちゃんと理解できなくて、自分自身もコントロールできない。攻撃されれば反論するだけで自分を省みないというような状況があると思います。

伊藤 今までそういうふうな指導を家庭でも小中学校でもされていない、土台がなくてスタートしている子が、うちの学校に来て、技術は仮にあるとしても、土台の指導をしていくうちに、その子がもうこの土俵に乗るのをやめちゃうというパターンもあるんです。指導者と合わないというふうな問題。サッカーやって何でそんなこと言われなきゃいけないんだと考える子もいるんですよね。

司会 小さい頃からサッカー好きの子供たちも高校生ぐらいまでにやめてしまう子供が多いですよね。とくに、指導者とのぶつかり合いが多い感じがします。

伊藤 土台をつくっていこうとするときに手を変え品を変えなんですよね。内田さんが言われているような肌で教えるというような考え方も一つあるでしょうし、それは指導者による個性もあるでしょうし、生徒による個性もあると思うんです。

やっとできた指導指針

内田 小学校から中学校に送り出すときの技術的、あるいは精神的に必要な部分。そういうのがしっかりしていれば、ピラミッドができていくと思うんですが。

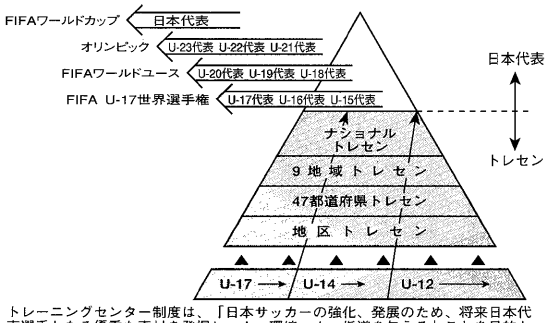
まず基礎は何かというところからスタートしたい。僕も中学の年代をやっていて、高校にはしっかりした基礎でできた上がったものを送りたいというのはあるんですよ。

野地 ピラミッドの部分は、日本サッカー協会がつくっているんです。小学校のときにはチームが勝つためにという評価をやめなさいと。十歳までは、十一人のサッカーは必要ない。七対七のほうが試合でボールにさわる回数が多くなる。十一対十一だと二十分試合やっていて二回しかボールに触らなかった。そうすると、その子はうまくなる機会はないんですよ。しかし、そうすると、ほんとうにそれでいいのかって現場から反論がでる。

例えば、小学校までのゴールデンエイジでは技術的なところを身につける。おそくても中一までだと。ここまでに技術的なことをやっておかないとそれ以上やってもうまくならないという年代がきちゃうわけですね。結局、中二、中三のグループの年代までにグループのところまでしっかりやろうと。グループというのは二人とか三人とか四人ですね。ポジションを理解し実践できるところまでは完成させましょうと。高校生になったら身体を強くする、一番筋肉がつく年代のときだから、高校の指導の中で走ってばっかりだという批判があったかもしれないけれども、これは間違っていない。だから、高校で戦術をやったり技術をやったりということ自体が間違いなんです。ここは走って体力をつけて、ゲームへの精神的な体力を養っていく時期です。

伊藤 野地さんのおっしゃるとおりです。それはトップのチームであってもそのような問題を日本は抱えている、という意味だと思いますけれども、現実には高校でインサイドキックってこうやって蹴るんだ、止める時はこうやってやるんだよ、とやっぱりそこからスタートせざるを得ないです。やっと、サッカーに関する指導指針というピラミッドの考え方

図―2 トレーニングセンター制度



トレーニングセンター制度は、「日本サッカーの強化、発展のため、将来日本代表選手となる優秀な素材を発掘し、よい環境、よい指導を与える」ことを目的として、1980年に本格スタートした。

図―1 発達段階に応じた一貫指導

区分	ユース										
	導入期		サッカーの基本の練習・習慣化 意識→無意識→実践状況						応用・実践		自立期
Age	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
◎中心となるトレーニング	ボールを使ったさまざまな遊び 多様な身体活動を含む運動 サッカーの導入ゲーム スモールサイドゲーム		4対4を中心としたスモールサイドゲーム（さまざまなバリエーションを利用してサッカーの基本を養成） 3対1、5対2などのポゼッション 1対1の攻防 基本の反復練習（必要性を理解させてから）			さまざまなバリエーションでの4対4を中心としたスモールサイドゲーム～7対7、8対8のゲーム 3対1、5対2などのポゼッション ジョーカーをつけたポゼッション（Be Alert!） 1対1の攻防 実践状況での基本の反復練習 11対11のゲーム（ゲームフリーズの活用）			スモールサイドゲーム～11対11（さまざまな形式での実践的ゲーム） 3対1、4対2などのポゼッション ジョーカーをつけたポゼッション 1対1の攻防 判断力を高めるためのコンディションつきゲーム ファンクショナルトレーニング		
◎指導のポイント	神経系にさまざまな刺激を（サッカーにこだわらない） 反復練習よりも多面的な活動 飽きさせないアクティビティ 楽しさを中心に		技術ー判断ー視野＝実践的な技術の養成（まずは実践、ドリルは必要性を理解させてから） ポジティブなミスを大切に! M―T―Mの活用 Focused Coaching ゲーム後の握手の励行→Fair Play			Bad Habitの矯正／Good Habitの追求 ポジティブなミスとネガティブなミスの取り扱い 個々に目を向けた指導→個人差への配慮（目標設定／要求レベル／指導） クラムジー期に対する配慮 フェアプレーの指導生活			個々に応じた課題設定と矯正 ゲームフリーズやVTRの積極活用 Ceiling Effectの防止→能力に応じた環境の提供 ピッチ内外におけるディシプリンの徹底 フェアプレーの徹底		

(財)日本サッカー協会「強化指導指針1998年版」

が一つ出てきたところで、十年、二十年たったときに指導者が変わり、その指導を受けた子どもが大人になった時に、どういうふうに変わってくるかなというところだと思うんです。画一的なコピーをつくれということかと批判もありますけれども、そうじゃないんですよ。これはサッカーのひとつのベーシックなセオリーという考え方で、そこからいろいろなものが出てくるんですよ。

野地　今まで小中高の学校教育の現場でのつながりがなく切れてしまうという状態が、サッカーだけでも何とかつながりを持っていこうよというところで協会が出した指針なんです。

司会　共通の言語というか、共通に理解する基準がやっとできてきた、という感じですね。

選手の成長という目標

野地　僕は、五年ぐらい前からサッカー協会関係のことをやるようになっていろいろなことで働きかけていますが、例えば、この間、日本代表とボリビアとの試合が横浜でありました。そのプログラムの中の選手の経歴のところに少年団まで載ってないわけです。前登録チーム、例えば、大学とか高校というのは出てくるけれども。高校選手権もそうだし中学校もそうだし、やり始めたところからみんな載せようよということをいろいろなところで働きかけているんです。

司会　なるほど。積み上がっていくものだと言うのを見せたい訳ですね。

野地　あしたの試合に勝とうという喜びのほかに、そういう選手を育てるという喜びもある。それが文化だと思う。

内田　チームにも励みになるよね。

野地　ちょっとした努力でできることじゃないですか。それによってみんな喜ぶわけだから、それがないとあしたの試合に勝ちましょう、というチーム目標ばかりになってしまう。

司会　そういう見通しとか道筋が見えていく、それが文化の厚みを増していくわけですね。

地域に根ざしたサッカーチームをつくり多様な選択肢を

司会　浦和とか清水とかは伝統があって独自のサッカー文化を持っていると思うんですけれども、そういうところと比べて横浜はどういう特色というか、やり方ができるんでしょうか。

伊藤　例えば、清水という町はチームの発足が小学校を単位としてスタートしています。それが結果的にクラブ化しているような形。横浜の場合には、基本は地域のスポーツ少年団にお任せして、そこからスタートです。今の日本の状況を考えると施設的な面でどうしても学校という施設を使わざるを得ないと思うんです。そこに指導者が一緒に乗っかっていればすばらしいと思うんですけれども、今はそこら辺がうまくできていない。

石井　横浜市の場合はまだボランティアでお父さんが指導しているところが多いですよね。育てるというよりもまだ勝ちたいほうに目標が行きます。

司会　少年団が百四十ぐらいある中でいくつかの種類があるようですね。地域のボランティアが運営しているチームから会費制のスポーツクラブなど。横浜の場合は他都市と違って小学校単位のチームは圧倒的に少ない。

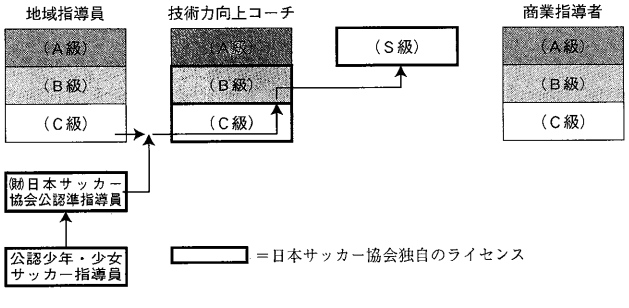
野地　逆に選択肢があるから、選べるわけです。YMCA、かながわクラブとかYSCCとか、その地域で専門のスタッフがいて子供が変に追い込まれないようにする、という面もある。これからもっともっとふえていかなきゃいけないとは思います。

伊藤　クラブチームが幾つかあって、親、あるいは本人に選択権があってこのチームに入りたい、この指導者に教わりたいというのがあると思うんですけれども、中学校にしても高校にしても学区があって、今の状況ではこの学校に入ったらこの先生の指導を受けなきゃいけないとか決まってしまっている。たまたま、その先生と折り合いが悪い、サッカーに対する考え方が違う、という場合も出てくる。代わりたい、というときに、正直言ってあまり受け皿がない。中学校でも高校より若干いいかなという程度しかないです。技術的な問題、人間的な問題を含めてその子たちはどうなってしまうのか。

司会　合わなかったときに選べるチームがあるといいですよね。

野地　神奈川県のジュニアユース四十六、ユースのクラブチームは十二。ほとんど横浜ですが。ジュニアユースとユースの連盟があるんです。二年前から、ひとつのクラブが四種（小学生）から一種（社会人、大学）まで持とうよという目標を持って推進していっています。少年団から上がって中学校で終わりじゃなくて、ユースもトップもつくっていく。

図―3　日本体育協会・日本サッカー協会公認指導者ライセンス制度



［公認S級コーチ］ プロチーム、プロ選手が指導対象の最高位に位置する資格。Jリーグ開幕を控えた1992年に開設。96年にはさらなる資質向上を目ざし、筑波大学大学院にJリーグと共同で「寄附講座」を開設し、その受講と単位取得をS級資格取得の必須条件とした。資格の有効期限は4年。

［公認B級コーチ］ 主にアマチュアの第1種加盟登録チーム・選手を指導対象する資格。日本体育協会との共同事業。資格の有効期限は4年。

［公認C級コーチ］ 主に中学生・高校生を指導対象とする資格。日本体育協会との共同事業。資格の有効期限は4年。

［地域C級スポーツ指導員］ 主に小学生を指導対象とする資格。各都道府県体育協会と47都道府県サッカー協会の共同事業。

［公認準指導員］ 主に小学生を指導対象とする資格。日本サッカー協会の指導のもと47都道府県サッカー協会が企画・運営。1991年に開設された日本サッカー協会独自のもの。

［公認少年・少女サッカー指導員］ 主に小学生を指導対象とする資格で、指導の初心者が手軽に受講できるように資格取得のための講習会も短期になっている。9地域サッカー協会・47都道府県サッカー協会が企画・運営。

その中から活躍するプロもでる。そしてまた戻ってくるというような世界をつくっていこうということでやっていきたい。そうすると、行ったり来たりできるわけです。トライしに行ってだめだったら戻ってこれる、自分のチームがある。そういうふうに今、推進しているんですね。社会体育として地域との結びつきを密にしていかないとクラブチームというのは残っていけない。そういうチームが根づいて、県内に二十、三十になってくると選手たちの環境が変わってくる。Jリーグよりかえってそういうチームのほうが歴史がありますから。

指導者講習会とライセンス制度

石井　指導者講習会とかそういう場はふえてきましたよね。前は一部の人しか受けられなかったんですけれども。

野地　一つは、公認少年少女指導者という資格が一番下にあるんですよ。これは講習会は一日半で済むんですけど、本来は登録チームには必ず一人はいなきゃいけないというふうにしていきたい、という方向にあるわけです。わかっている指導者が一人いて、その指導者が中心となっていれば、大きな間違いは起こさないですよ。そういう意味では、サッカーというスポーツがライセンス制度としては日本の中で一番進んでいるものだろうし、人数も多いし、それが将来うまくいったらば……。

4　ワールドカップをきっかけに サッカー文化の定着を

司会　最後にワールドカップ開催の意味についてどうお考えですか。

野地　現状としては早いと思います。だから、大変なんです。現場にいる僕らが考えなきゃいけないんでしょうけど、お土産が残るようにね。グラウンドの話はもう間違いなく今回のワールドカップを契機に動き出してほしい、ということです。

　市民利用のサッカー専用グラウンドが一カ所でも整えば、そこを母体にして広がりが出てくる。横浜の中でサッカー活動の拠点ができるわけです。指導者講習会やるところ、それから交流試合、大会をやるところという拠点ができてくると、全然違ってくると思いますね。ましてやそこにクラブハウスがついて、更衣室とシャワーとトイレがあるというようなね。それはプレハブでも構わないんですが。とりあえず、あればクレーでもいいですよ。まずはそこからだと思います。

　横浜市のサッカー環境も今、大きく変わって、昔の蹴って走れというサッカーが主流で速いフォワードがいて一生懸命足をとめないでサッカーをやって優勝できたという時代からは大きく変わってきた。そういうことは時間がかかることで、それが間違いなく十年後、二十年後にはもっと進歩していると思います。そうしたらもっといい選手が育ってますから。

現場もホスピタリティの立場にたって

内田　ワールドカップでは、サッカー関係の人も自分が楽しみたい、という気持ちが強いのですが、役員は試合はまともには見れないですよ。でも、それを支えていかないと来ている人に対して失礼ですよね。その辺のところをわきまえていかないと。何十万人の人間が支えていくのか知らないですけど、やっぱり裏方さんが一番大変だと思うんです。その裏方さんが一人でも違う方向の見方をしてしまうとよくないなという気はしますけどね。

石井　僕は、ワールドカップを機に、Jリーグを盛り上げていかなくては、と思います。Jリーグが盛り上がることが、本当の意味でのサッカー文化の定着発展につながることだと思います。ワールドカップを一過性のイベントに終わらせず、子ども達が身近にJリーグを応援し、感動と夢を持てるようにしていくことが大切だと思います。

野地　小、中、高、どんなレベルの人たちもサッカーにかかわっている人たちがどうやってこのイベントを盛り上げようかという立場の人間になれるかどうかなんですよ。楽しもうではなくてホスピタリティという部分なんだと思う。海外や県外の人をもてなしていこうという立場、スタンスになれるかどうかにかかっている、と思います。

司会　今日は、お忙しい中、ありがとうございました。

＜司会＝企画局調査課担当係長中川久美子＞